

5 アーティストのいるまち ～黄金町における文化芸術による地区再生～



鈴木 伸治
SUZUKI Nobuharu

NPO法人黄金町エリアマネジメントセンター／理事長
横浜市立大学国際教養学部／教授

アートをまちづくりに生かすだけでなく、アーティストが暮らすまちもある。アーティストをまちに誘致した経緯や狙い、アートやアーティストがまちにいることはどのような効果をもたらしたのか、横浜市中区黄金町地区の事例から解説する。

はじめに

横浜市中区黄金町地区はかつて悪名高い売買春の盛んな地区であったが、現在は国内外約50名のアーティストが滞在制作を行うアーティスト・イン・レジデンスのまちとなっている。筆者は横浜市立大学の教員として、また、地区におけるアートイベントやまちづくりを下支えするNPO法人黄金町エリアマネジメントセンター（以下、NPOと略す）の理事として20年近く地区に関わっている。この経験をもとに「アーティストのいるまち」のまちづくりについて考えてみたい。

横浜市の創造都市政策

黄金町のまちづくりは、横浜市が20年以上推進してきた創造都市政策の一部として取り組まれている。2000年代初頭、旧市街地である関内地区の活性化を目的に、文化芸術・観光による都心部活性化検討委員会が設置され、「文化芸術創造都市－クリエイティブシティ・ヨコハマの形成に向けた提言」が2004年に取りまとめられた。

1970年代より取り組まれてきた都市デザインの実践を、文化振興、産業振興と連携することによるシナジー効果を求めた領域横断型政策が模索された。この政策は当初、①アーティスト・

クリエイターが住みたくなる創造環境の実現、②創造的産業クラスターの形成による経済活性化、③魅力ある地域資源の活用、④市民が主導する文化芸術創造都市づくり、という四つの目標を掲げていた。2007年頃からスタートした黄金町地区の再生はこの政策の一部として実施されていくこととなった。

天国と地獄のモデルとなったまち

文化芸術による地区再生の試みが行われているのは、京浜急行電鉄日ノ出町駅、黄金町駅の間に位置する大岡川沿いのエリアである。戦前は、大岡川の舟運を生かして、材木商や問屋などが立地するエリアであった。しかしながら、空襲と戦後の大岡川



写真1 1995年ごろの風景（撮影：山田秀樹）



写真2 バイバイ作戦後（2005年～）のまちなみ



写真3 2015年ごろのまちなみ

対岸エリアの米軍による接収により、地区の様相は一変した。ヒロポンなどの麻薬の蔓延、米兵を相手とした売春行為の横行などである。終戦直後の混乱の中で京浜急行電鉄の高架下には「ちよんの間」と呼ばれる売買春を行う小規模店舗が集積していった。治安も悪く黒澤明の映画『天国と地獄』の「地獄」のモデルとなったとされる。

その後、麻薬禍は収束したもの、売買春行為は黙認され、徐々に外国人女性を中心とした売買春エリアへと変貌していった。

この地区に変化が訪れたのは、1995年の阪神・淡路大震災後であった。国土交通省の通達により、鉄道高架の耐震補強が急務となり、高架下にあった約100軒の小規模店舗は、高架下から高架沿いへと移転した。その際、地上げが行われ、新たに小規模店舗が建設され、最大260軒までその数は増加した。エリアは拡大し、治安は悪化の一途をたどっていった。客引きの女性たちの脇を子供たちが通学するといった異常な状態であった。風俗エリアの拡大を懸念し、地上げに悩む住民、PTA関係者が話し合い、2002年に風俗拡大防止協議会（後の初黄・日ノ出町環境浄化推進協議会）が設立され、市や警察に協力を求め、取り組みをスタートさせた。彼らの努力が実を結び2005年

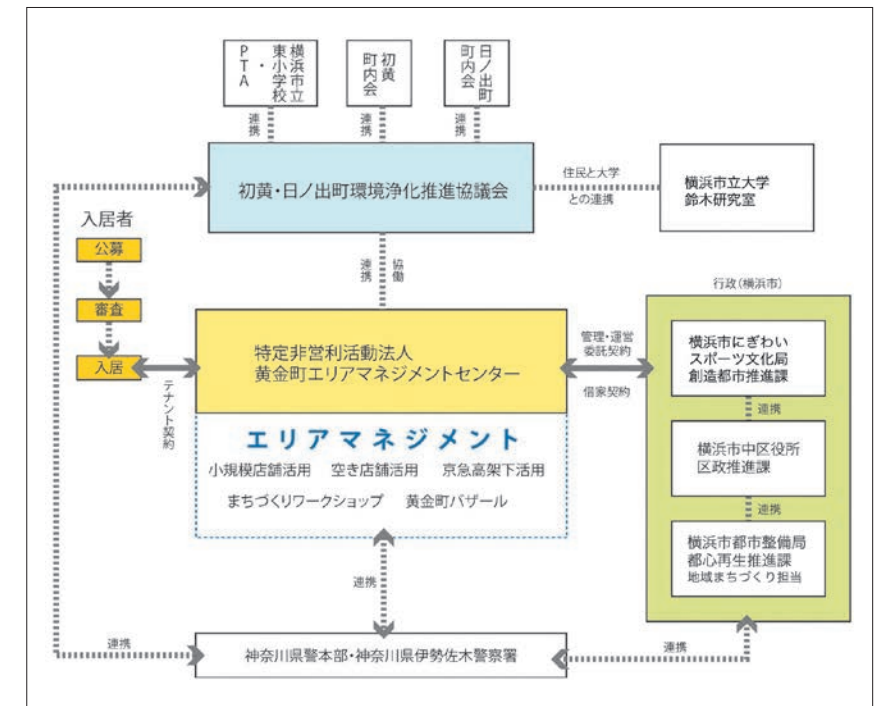


図1 地区再生の運営体制

には違法な営業を行う小規模店舗の営業を停止するバイバイ作戦が実施された。機動隊の投入など、行政、警察、住民団体の協力により、小規模店舗の営業は一掃され、作戦は成功したものの、260軒の空き店舗と地上げによって住民数の減少したまちは、ゴーストタウンのような様相を呈した。筆者は当時の町内会長より依頼を受け、2007年からこの地区再生の活動に参加しているが、当初はまちを歩く人もほとんどおらず、何から手をつければ良いかわからないような状態であった。そのため、小学校に



写真4 小学校でのワークショップ風景

出向き、子供たちと安全・安心のまちづくりについて考えるワークショップなどを行い、地域住民の参加を呼びかけていった。

黄金町バザールの始まり

こうした小さな活動が始まりつつあるなか、横浜市では地域住民の合意を得て、創造都市政策の一環として、ヨコハマ・トリエンナーレに時期をあわせ、黄金町を舞台に現代美術の展覧会を開催することとした。横浜市は京浜急行電鉄の協力を得て、耐震補強が終わった高架下に二つの文化芸術スタジオ（黄金町スタジオ、日ノ出スタジオ）を整備し、小規

模店舗の一部を借り上げて展示スペースとすることによって、まちに展開するアートイベントの実施が決まった。ディレクターには、福岡のミュージアムシティブロジェクトの創始者であり、まちなか展開型アートプロジェクトの草分け的存在である山野真悟氏を招聘し、将来のまちの姿を実現してみることがテーマとして、第一回黄金町バザールが開催された。イベント名にはあえて「アート」を入れず、期間限定の店舗なども組み込まれた展覧会であった。実際には当時、地区には営業している店舗もなく、休憩スペースもないことから、苦肉の策であったともいえる。横浜

市立大学でも、小規模店舗をリノベーションして、まちづくりの拠点としていたが、展覧会の参加者も入れるカフェスペースを運営したり、毎週末、大岡川沿いにパラソル・ショップを展開したりもした。今時の言葉で言えばプレイスメイキングのようなプロジェクトであった。しかし、当時、横浜市民にとって、黄金町は行ってはいけない場所として知られており、川沿いに散歩する人も皆無であったことから、何かが行われている、楽しげな場所であることを伝えるための試みであった。

幸い、目新しさもあり、多くの方が来場したことから、継続して開催すべきであるとの地域の意向も



写真5 川を使った展示 プ・ユン（中国）



写真6 高架下を使った展示 さとうりさ（日本）



写真7 路地を使った映像展示 志村信裕（日本）



写真8 かいだん広場でのマルシェイベント

固まり、実行委員会と地域住民の代表によって構成されるNPOが設立され、第二回以降は、このNPOが、アートイベントの開催やまちづくりの実践の担い手となっていった。

アーティストのいるまちへ

現在、黄金町には公募で選ばれた国内外の50名近いアーティストが滞在し制作を行っている。その始まりは黄金町バザール参加作家の滞在制作であったが、イベント終了後は高架下スタジオと小規模店舗をアトリエへとリノベーションし、アーティスト・イン・レジデンスプログラムがスタートした。

この小規模店舗の転用は行政が小規模店舗を借り上げ、それをNPOがリノベーションし、アーティストのアトリエとして提供している。これは単なる文化芸術活動支援というだけでなく、不動産マネジメント的な取り組みである。

かつての小規模店舗は転賃を繰り返し、その間に家賃が上昇し、その一部が、反社会的勢力に流れているケースがあった。逆にオーナーの中には、実際にどのような使われ方をしているかについては、理解しないまま、少ない家賃を受け取っているような場合もあった。こうした負の連鎖を断ち切るため、オーナーに複雑な権利関係を解消してもらい、横浜市が適正な賃料でこれを借り上げるという措置がとられるようになった。こうして借り上げられた旧小規模店舗物件は2025年2月時点で78にのぼる。中には行政による借り上げ期間を終了し、通常の不動産物件として貸し出されている物件もあるが、違法な営業行為は確認されていない。

まちづくりの面では、アーティストと住民の交流も深まり、制作活動に地域住民が協力したり、住民の協力でまちかどに展示されたりする作品も増えていった。

その象徴とも言える「かいだん広場」は地域住民の力で整備された高架下の広場である。NPOスタッフ、建築家などのサポートで計画案を作成し、横浜市の「ヨコハマ市民まち普請事業」に応募して獲得した助成金によって整備された広場は、マルシェイベントやアートイベント、子供たちの遊び場として利用されている。

私見ではあるが、アートイベントが地区を再生するのではなく、アートプロジェクトを介して交流が生まれ、社会関係資本としての地区内外の人のつながりが醸成されていくことが、重要であると考えている。

アーティストもいるまちへ

近年は、大岡川に整備された桜栈橋を起点として、スタンド・アップ・パドルに取り組む団体の活動も定着し、多様な人が集まるまちになりつつある。京浜急行電鉄も高架下の店舗開発やエリアマネジメント分野への注力を続けており、より多様な人たちが交流する場となってきた。アーティスト「も」いるまちへ変化しつつあるということもできるだろう。

また、地区の住民からは、経済的な活性化を望む意見も多い。そのためには、新たなまちの担い手を巻き込み、世代交代していくことや、エリアマネジメント体制の再構築なども大きな課題といえるだろう。